

これからの気象変動に備えた、良質な米を作るための

ふさがねの栽培暦



ふさがねちゃん

- ※ 適正生育量を厳守して、登熟期の高温下でも良質な米を生産できる栽培に取り組みましょう。
- ※ 良食味を維持するため、収量は10a当たり600kgを目安にしましょう。
- ※ 大粒で良品質・良食味品種の特性を活かして産地ブランド化を推進しましょう。

品種の特性

1. 大粒で、高温登熟下でも未熟粒の発生が少なく品質は良好。
2. 「コシヒカリ」並みの食味。
3. 耐冷性は「ふさおとめ」並みの「極強」である。
4. 穂いもち抵抗性は「ふさおとめ」「コシヒカリ」より強い。
5. 成熟期は「ふさおとめ」より5日遅い中生品種。
6. 収量性は「ふさおとめ」「コシヒカリ」に優る。
7. 穂数は「コシヒカリ」並みで「ふさおとめ」より少ない。
草型は中間型、止葉が立ち、草姿は良好。
8. 「コシヒカリ」より短稈で耐倒伏性は強い。

適正生育量

穂数	350~400本/m ²
籾数	27,000~31,000粒/m ²
登熟歩合	85%
千粒重	23.5~24.0g
稈長	80cm以下

月 旬	3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生育ステージ	は種			田植			分けつ 開始期			有効 分けつ終止期			幼穂形成期			出穂期			成熟期		
及び 主な作業	浸種・催芽			育苗 基肥・代かき			除草剤散布			中干し			穂ばらみ期 穂肥			収穫					

栽培のポイント

● 催芽を確実に実施し健苗育成

- ・箱当たり播種量は150gとする。
- ・浸種水温を10℃以上とし、浸種期間を「ふさおとめ」並に長く(10℃で10~14日程度)する。
- ・催芽はハト胸状態まで確実に実施する。
- ・「コシヒカリ」に比べ苗が伸びにくいので、育苗培土の窒素量は箱当たり1.2~1.5gとする。

● コシヒカリより1~2kg多い基肥窒素量

品質重視の基肥窒素量を厳守

- ・土壌別基肥窒素量(kg/10a)
砂質土:5~6kg、壤質土:4~5kg、粘質土:3~4kg
また、りん酸8~9kg/10a、加里7~8kg/10aを施用する。

● 過度な疎植を避け茎数確保

- ・移植時期は4月15日~30日とし、倒伏防止のため5月連休明け以降は避ける。
- ・栽植密度は55~60株/坪(17.0~18.5株/m²)程度とし、極端な疎植にしない。
- ・植付け本数は3~5本/株とする。

● 幼穂形成期に理想的な稲の姿を目指す

(目標値)

草丈	60~65cm以下(上限値)
茎数	450~500本/m ²
葉色	38~42(SPAD値)
茎数×葉色	17,000~21,000

- ・6月初めから幼穂形成期まで中干しを行う。

● 適切な水管理で品質、登熟の向上を図る

- ・幼穂形成期~出穂後2週間は湛水管理を行う。
- ・その後は間断かんがいで管理し根の活力を維持しながら粒の充実に努める。

● 穂肥は出穂前18日、実肥はやらない

- ・穂肥は幼穂形成期の茎数が目標とする450~500本/m²のときは、出穂前18日(幼穂長10mmが80%)に窒素と加里を3kg/10a施用する。
- ・生育が目標値より多い場合は窒素を減量し、下回る場合は出穂前25日(幼穂長1mm)に穂肥を施用する。
- ・実肥は玄米中のタンパク含量が増加し食味の低下を招くので絶対に行わない。

● 刈取り適期と調製基準を守り、最後の仕上げを

- ・刈取り適期は出穂後37日前後で、穂全体の85%が黄化したときを目安とする。
- ・急激な高温乾燥や過乾燥を無くし、14.5~15.0%に仕上げ乾燥する。
- ・粒が大きいので選別のふるい目は1.8mm以上とする。
- ・収量は、630kgを超えると食味が低下するので注意する。

その他の技術は慣行の基本技術で栽培する

栽培のポイントを守り良質米の生産に努めましょう

千葉県・千葉米改良協会



このポスターは、千葉県・千葉米改良協会が、印刷プロセスで使用する1.17kgのアルミ版をリユースして印刷する事で、CO₂排出量を11.90kg削減しました。



11.90kgのCO₂削減量は、約500kg(約220リットル)のCO₂削減に相当します。